



● 目次

“誕生” 岐阜大学国際交流センター

「小さな、きれいな家を出て広場に」	国際交流センター長	小澤克彦… 2
「新たな国際交流の発展に向けて」	国際交流センター主事	堀内孝次… 2
「ひととの交流にふれて」	学生部学生課長	須崎 洋… 3
「『国際交流センター』の開設に思う」	学生課国際交流事務室長	森山 章… 4

国際交流センターの活動紹介

☆日本語教育	国際交流センター員（教養部）	三浦陽一… 5
☆日本事情紹介	国際交流センター員（教育学部）	佐原秀一… 5
☆国際理解教育	国際交流センター員（教育学部）	松川禮子… 5
☆学 生	国際交流センター員（工学部）	辻 康之… 5
☆ホームステイ	国際交流センター員（農学部）	原 徹夫… 5
☆サマースクール	国際交流センター員（工学部）	松浦晃次… 6
☆歓送迎会	国際交流センター員（医療技術短期大学部）	瀬戸崎康子… 6
☆医療	国際交流センター員（医学部）	加藤直樹
	国際交流センター員（医学部）	奥野正隆… 6
☆会計	国際交流センター員（農学部）	前澤重禮… 7
☆広報	国際交流センター員（教養部）	林 正子… 7

サマースクール報告

「1995年度夏期短期留学についての報告」	国際交流センター員（工学部）	松浦晃次… 8
* 留学生体験記		裴 美仙… 9
	トールブヨーン・オルソン… 9	
* ホームステイファミリーから	岩田美智子… 10	
	岩井光一… 10	
	北村 望… 11	
* 日本語授業	国際交流センター日本語講師 加藤由起子… 11	
* 国際理解の集い	国際交流センター員（教育学部） 松川禮子… 11	
◎新任紹介「はじめまして」	学生部国際交流係事務補佐員 田中千亜紀… 12	
	学生部留学生係事務官 小林恵子… 12	
◎国際交流のための奨学寄附金		13
◎平成7年度岐阜大学国際交流センター員名簿		13
◎お知らせ		14
◎編集後記		14

“誕生” 岐阜大学国際交流センター

小さな、きれいな家を出て広場に

国際交流センター長 小澤克彦

国際交流という言葉も考えてみれば変なものだ。世界中の大多数の民族、国々はその歴史においてまるで炒り玉子のようにかきまぜられてきた。要するに、いいも悪いも、否も応もなく「交流」させられてきて、今更「国際交流」もへったくれもありやしない。

だが、日本はどうも、幸か不幸か分らないけれど、違っているようだ。確かに古く朝鮮・中国と付き合いはあったけれど、これは文化を「教えていただいた」のであって対等のお付合ではなかった。明治期の西洋との付合も同様で、留学生を送ったり先生を迎えたりして「教えを乞うた」のであった。これ以外の付合方は知らなかつたから、知識が得られたと思ったら、「もう教わる必要はない」と付合の必要性を認めなくなる。未熟な外国人がやってくるなどとんでもない事と思う。この日本、小さなきれいな自分の家はきちんと囲み、おかげこ事に子供を通せながら「上客」以外の人は決して入れない、そんな家族に似ている。

一方、この家族、近所付合や身内にイライラが起きたりすると切れてしまって、恩人の家になぐり込みをかけてしまった。言うまでもなく、かつての秀吉による朝鮮出兵や第二次大戦での朝鮮・中国・アジア侵攻がそんなものだ。なぐり込まれた方はびっくり仰天したろうけれど、なぐり込んだ方は、丁度金品を巻き上げなぐりつける“いじめっ子”が「いじめられる方が悪い」と主張するに似て、決して自分の非を認めようとしない。こんなパターンがかつて日本の為してき

た「国際関係（？）」だと言える。

一方、さすがに世界は変って、というか落着いて「炒り玉子」状態は少なくなってきた。しかしこまだ在るし、何よりその歴史を通じて、人々が意図的に交流し共にやっていく事の大切さを学んだようだ。家に閉じこもっていたのでは家の保持も難かしく、他人の家の芝生は青くきれいに見えてイライラしたり、疑心暗鬼になつたりして、とんでもない家長に踊らされたりして再び炒り玉子になってしまう。それ故、世界は一つの、みんなのための広場にならなくてはならない。そこで皆でマイム・マイムでも踊れりゃしめたものだ。そしてこそ世界は楽しく平和になれるだろう。

若い人はいい。特に若い女性はいい。輝いてその輪の中に入っているこうとする。だが無念、日本の御老体はダメだ。国際感覚からいうと大体50才以上が老人だけど、老人は向こうから外国人が来るとビビッてしまい、逃げるように立ち去るのが常だ。そして昔のパターンに固執している保守派は驚くほどたくさん居る。こんな頑迷な老人達は放っておいて若い人達は家を出て行くがいい。若い人は老人のようであつてはならない。広場のダンスを逃げる若者など全く魅力がない。

国際交流センターは、そうして広場へ出て行ってマイム・マイムを踊る若い仲間達のものとして作ったものなのだから、みんな集まり楽しくやっていってくれたらうれしい。

新たな国際交流の発展に向けて

国際交流センター主事 堀内孝次

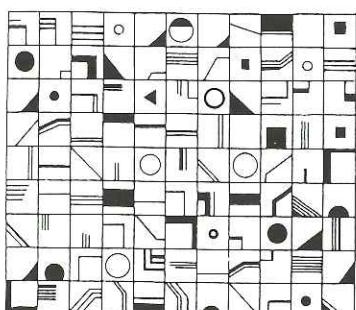
この4月に旧国際交流室が国際交流センターと改称され、これまで手狭となっていた本部事務棟の「間借り部屋」から、改装された独立棟（旧短大ホール）に移ることができたのは岐阜大学の今後の国際交流の發

展に極めて意義深く、かつ重要である。建物内部にはセンター長室、主事室、講師控室をはじめ多目的研修室、談話室等が整い、さらに学生部の国際交流係と留学生係が揃って本センターに移転したため、国際交流

関係業務が効率化された。このことは国際交流の重要性と必然性についての認識がやっと全学的に受け入れられたことを示すもので、誠に喜ばしい限りである。旧国際交流室が開設されて以来、10年余り経つが、また新たな発展段階に移ったという思いで感無量である。

海外からの留学生数が200人を越え、また協定大学数が13大学と増えた現在、最早、従来の学部代表教官からなる室員と関係事務官の頑張りのみでは、増大かつ複雑化していく国際交流活動への対応が難く、新たなシステム作りが待望されていた。新センター体制はこれに対応するものである。この意味からもセンター開設はそれ自体、今日、激動する世界情勢の中で一段と積極的な国際化対応が望まれるわが国で、岐阜大学が地域の国立大学として国際交流活動に先進的な一大学として、これまでどおりの高評を維持していく上で新たな基盤を得たことになる。

国際交流センター誕生の背景には、これまで実に多くの人々による汗と情熱の支援があったことが思い出される。歴代の室長達と室員達、国際交流委員会の委員長や委員の先生方、それに日本語非常勤講師やボランティアの一人一人の顔が浮かんでくる。最初に国際交流活動を生み出すための一石を投じた人達、それをしっかりと受けとめ国際交流活動の枠組みを確立した人達、そしてシステムとしての中味を充実させるために今日の実績を積み重ね努力してきた人達。これらの人々に改めて敬意を表したい。しかし、国際交流活動に関わった人達の中には、辛かったことや楽しかったことなどの経験が、むしろ自分自身の国際感覚を養うことにつながったり、また国際交流の必要性を直に学びとったと感じている人達も少なくないと聞いています。今や岐阜大学の国際交流が確固たる全学体制で推進され、国際交流の輪がかつての国際交流室から国際交流センターへ、そして学内から地域へと広がり、まさに地域の国際交流センターとして着実に発展していることを素直に喜びたい。



ひととの交流にふれて

学生課長

須崎 洋

今年は、昨年と違い相当長い梅雨となり、毎日うとうしく痛感する。

長い人生のひとコマから考えると、ちょっと長雨の連続であっても、煩わしく感じる。

わが国では、この季節に相当期間にしとしと雨がふることは当然のことであり、むしろ、自然の摂理には棹差せないことを、私達は、多忙であるとの理由により、つい、忘がちにしているのではないだろうか。

本学で、国際交流事業の担当となり、早や、ONEサイクルが過ぎてしまった。「光陰矢の如し」と称されるように、この間、留学生や研究者のために充分なお世話ができたのかと、いつも反省するばかりである。忙しければ、それなりに、独り善がりになり、都合の良いように判断するのも、エゴによるものなのか、いつも反省の連続である。

今後、我が国が、21世紀に国際貢献できる分野は、「教育・研究面である。」と種々の会議等で指導を受けるとともに、大学に籍を置く者の1人として、何に、どう、リアルタイムに対応できるか、できるためにはどうしたらよいかを常に思考している。

物事は、最初から、完璧にはできないかもしれないが、「できるところから、できるようにをモットー」にして頑張っているところでもある。今年も、昨年に劣らず相当多忙を極めるようであるが、一歩ずつ確実に、良き汗を流したく、いつも、準備万端でいる。その頃には、梅雨も過ぎ、太陽がまばゆい季節になっていることであろうし、いい汗をかきながら、ひととの交流のために前向きに頑張っている自分を確認したいものである。

「国際交流センター」の開設に思う

学生課国際交流事務室長

森 山 章

「交流室の○○先生お元気ですか。○○先生は。?」

本年6月、初めて東南アジアへ行ってきました。^(注1)

その旅先のジャカルタとバンコクで懐かしい友人に会いました。

私が留学生係の担当だった昭和62、3年頃のインドネシア政府派遣留学生や教員研修留学生であった留学生との再会でした。そんな彼等（彼女）との会話の中で共通の質問が日本語の先生達を気遣う言葉でした。

昭和59年、当時の留学生数は40人。その年に文部省から発表された「留学生受入れ10万人計画」を受け、また、本学に学ぶ留学生、研究者の日本語・日本文化を習得及び生活をはじめとした様々な相談体制等を整えるために、同年9月、学内措置として本部棟一階に「国際交流室」が誕生しました。

スタッフはボランティア、運営費は企業等からの奨学寄附金、といった手作りの運営でしたが、日本語教育、国際理解教育、本学教職員・学生に対する外国語教室、夏期短期留学生の受入れ、広報等の企画を工夫・改善を加え、また、学内外の御理解により着実に成果を上げてきました。

そして、平成6年秋、留学生数は200人を超えた、当時の5倍に増えたのを機会に、将来の「留学生センター」（省令施設）の布石として本年4月、「国際交流センター」が開設されました。

センター開設と同時に学生課国際交流事務室（留学生係・国際交流係）もセンター内に移転し、留学生・国際交流センター事務の一本化が図られ、本当の意味での国際交流の場として充実が図られてきました。

新しい「国際交流センター」では、それぞれの行事について自己評価、自己点検を繰り返しながら「国際交流センター」から「留学生センター」へのレールを引くと共に、21世紀における岐阜大学の国政交流の在り方を創り出していかなければいけないと思っています。

そしていつまでも、帰国した留学生から「お元気ですか。」と声掛けられるような暖かい「国際交流（留

学生）センター」でありたいと思います。

最後に私達の勤務する学生課国際交流事務室の組織を紹介いたします。気軽にお立ち寄りください。

学 生 課（課長 須崎 洋）

293-2132

国際交流事務室長 森山 章

293-2140

国際交流係長

粥川美重子

293-2141

留学生係長

葛谷和彦

293-2137

国際交流係員

藤田美穂子

293-2142

留学生係員

小林恵子

293-2137

国際交流センター（FAX：293-2143）

(注1)

(財)日本国際教育協会主催の『日本留学フェア』に、小川学生部長と共に参加し、インドネシア（ジャカルタ）、マレーシア（クアラルンプール）及びタイ（バンコク）において、我が国の教育事情や「岐阜大学」そして「岐阜」を紹介してきました。これは、日本留学希望者が自らの留学目的に合った大学等を選択し、実りある留学を達成できるようにするために、賛同する大学の担当者が、我が国の教育事情や個々の大学の教育、研究上の特色等について的確な情報を提供するために、実施されたものです。

国際交流センターの活動紹介

●日本語教育●

センターでの日本語教育は、毎年春（4月）と秋（10月）に開始され、一年間で終了する。前半6ヵ月は、初級者（ほとんど日本語を解さない留学生）を対象に9コマ／15週×90分の授業が行われ、後半6ヵ月間は、前半の授業を終了したものあるいはそれと同等の日本語能力を有するものを対象に、6コマ／15週×90分の授業が行われる。この他に、医学部で、週2コマずつの授業が初級者の為に行われている。また、先に述べた“集中的”（intensive）な日本語授業を取ることが不可能な留学生の為に、週2コマずつの授業が行われている。

授業は、5人の非常勤講師によって行われている。各講師の授業は、週数回のミーティングによって有機的なつながりをもちながら行われ、現段階ではoptimalな成果を上げている。

なお、日本語教育のガイダンスは、4月上旬、10月上旬に行っている。
(三浦陽一)

●日本事情●

サマースクールにおける日本事情講義の位置付けと講義内容への配慮は大変重要である。サマースクールで行われる他の企画は、現在を切片に、あるいはトヨタ工場見学に代表されるような現在を実際に目で見ることのできる場で、物を通して現代日本の状況を学ぼうとする位置付けがなされているように思われる。そうであるならば日本事情講義においては、一つの位置付けとして過去からの時間の流れ（伝統）、あるいは物質ではなく、精神文化からの位置付けがなされても良いように思われる。昨年からの日本事情の企画は、原則としてこのような趣旨に基づき位置付けがなされてきた。

本年度の講義は次の四講座である。①禅の講義と専門僧堂での禅の実習 ②茶道講義と茶道実習 ③岐阜県博物館にて工芸品の鑑賞と刀鍛冶の見学 ④仏教の講義と仏像の鑑賞

民族固有の精神文化への理解がその民族への理解に大いに役立つことを考えた場合、サマースクールにおけるこの分野の一層の充実が望まれるのである。

(佐原秀一)

●国際理解教育●

国際理解教育としての主な活動は、外国語講座と「国際理解の集い」の開催です。

外国語講座は教職員、学生を対象に毎日昼休みを中心を開かれています。現在、ポルトガル語、英語（初級、中級）、中国語、ハングル語の5講座です。

「国際理解の集い」は、年に2、3回キャンパス内で留学生にスピーチをしてもらったり、特定のテーマのもとに留学生と学生、教職員で意見交換する催します。ここ1、2年は、サマースクール期間中や大学祭の間に行い、多数の参加を得てなかなかの盛り上がりをみせています。キャンパス内にせっかく多くの留学生を迎えるながら、日常的には交流の機会は決して多くありません。「教育について」とか、「女性の地位について」といった様々なテーマで討議して、相互理解と交流の輪を広げていきたいと思います。（松川禮子）

●学生●

学内には留学生との交流を行うことを目的のひとつとしているサークルがいくつかあります。学生担当は彼らと留学生の橋渡し役を行っています。秋にはピクニックやボーリングなどのリクリエーションの企画も行っていますので、サークルのみならず広く学内からの参加をお願いします。そしてこのような活動を通じて、一般学生と留学生との交流がますます盛んになることを期待しています。また、国際交流センター内のパソコンには、現在また過去の留学生に関する情報を集めデータベースをつくっています。現在のところは、留学生帰国後の連絡などに活用しています。今後はこのコンピュータを学内のLANに接続し、サマースクールや短期留学に関する情報をインターネットを通じて提供するなど、そのサービス向上に努めたいと考えています。

(辻 康之)

●ホームステイ●

留学生が地域の人々と親睦をはかり、また双方の方がより深くお互いの国の文化や生活を理解するため、希望する留学生には登録している家庭（ホームステイファミリー）にホームステイをしてもらっています。平成7年度のホームステイファミリーは学内6、学外14家族となっており、留学生からホームステイの希望が出た時点で、留学生の希望にかなうご家族に受け入れをお願いしています。これと並行して、毎年開催さ

れるサマースクール期間中に、参加留学生のために数日間（平成7年度の場合は2泊3日）のホームステイをカリキュラムの中に組み込んでいます。この企画は、短期留学という限られた時間の中で、留学生が日本人と触れ合い、日本の生活などを深く知る機会となっています。また、ホームステイファミリーの方に、大学の国際交流関係の行事にも積極的に参加してもらい、留学生との交流を深めていただくようにお願いしています。

（原 徹夫）

●サマースクール●

毎年6月になると提携大学との間の交流の一環として短期留学生がやってくる。今年から別棟に移って活動を始めた国際交流センターは急に忙しくなる。学生部の職員とセンター員は、4月の初めからこの準備に追われる。留学生たちは梅雨期から夏空の訪れまでの8週間を過ごす。1988年（昭和63年）から今まで8期にわたってこの行事は続いている。第5期生まではずっとスウェーデンのルンド大学の学生だけだった。1993年からノーザンケンタッキー大学の学生が参加し、今年はそれにソウル産業大学の学生も加わり国際色が豊かになった。

短期留学生は、5週間にわたり日本語教育を受ける。これはかなり激しいスケジュールであり、宿舎では毎日のように宿題に追われているという。その後は3週間コースの新しい留学生も加わり、日本事情に関する教育が順次受けられる。それらは参禅・能・茶道それに仏教や仏像の講義と実地体験であり、陶芸・日本刀の鍛造・鵜飼・大相撲などの見学がある。さらにトヨタなど中部地区の工場見学会があり、徳川美術館・名古屋城・名古屋市博物館を訪問する近世の歴史の見学も含まれる。

留学生の期待を集めるのが2回にわたるエクスカーションである。一つは、奈良・京都の仏像めぐりであり、庭園と古建築の鑑賞である。もう一つは乗鞍岳・上高地など日本の誇る景観を味わうこと、高山・古川の古い家並の中を歩み地方都市文化に接することである。この残り3週間には、今度は体力が要求される。最終日には反省会が開かれ、新しい年度のため留学生からの発言に耳を傾ける。これが岐阜大学のサマースクールの概要である。

（松浦晃次）

●歓送迎会●

歓送迎会を担当しています。ご承知のように、留学生が岐阜大学に来、教官、事務官、そして他の留学生

と顔を合わせる最初の機会が、歓迎会であります。そしてまた、帰国にあたり、彼らに顔を合わせる最後の機会となるのが送迎会であります。留学生にとって、異国での慣れない生活の最初と帰国を目前にした最後は、最も思い出深いものです。そういう点から、彼らが始めからリラックスでき、楽しめ、心を通い合せる契機になれば幸いであると考えています。幾分、日本式の歓送迎会であることは否定できませんが、留学生を歓迎し、また別れを惜しむ気持ちを大切にし、さらに岐阜大学での留学経験が良い結果をもたらすよう願いながら、担当しております。

（瀬戸崎康子）

●医療関係●

本来はお役に立たないで済むのが望ましい役割ですが、万一に備える意味で、今年からEmergency phoneの中に医学部附属病院のみでなく、いくつかの施設に御協力いただくことになりました。保険管理センター、平野総合病院、岩砂病院、江幡歯科の各先生方の御理解によるものであり、紙面をお借りして厚くお礼を申し上げるものであります。

中でも、今年の留学生の一人が、不幸にも体調を崩し入院が必要となりました。その際、緊急に対応を依頼申し上げた岩砂病院が、万全の体制を整え対応していただけたことには、岩砂和雄院長・岩砂三平内科部長、両先生に心より敬意と感謝の気持ちを申し上げるものであります。患者は病院からクラスへ通学でき、きっと他では味わうことのできない有意義な経験をしたことと思います。但し、気掛かりなのは、留学生の健康管理に対する（財政的裏打ちのある）しっかりしたシステムがないことです。今回ることは、良い教訓として、更に万一の事態にも対応できるシステムを作らねばと痛感しています。とかく健康上の問題ということで、第三者の善意に甘えてしまいがちですが、国際交流センターとしてどう対応すべきか、また何が出来るかをしっかり考え直さなくてはと、反省しています。留学生諸君に安心して、日本の生活をエンジョイしてもらう為にも、更に検討すべき点が多く残されていると思います。

（奥野正隆・加藤直樹）

●会計●

世の古今東西を問わず、ある組織や団体が何らかの活動を計画し実行に移すには必ず金銭問題が絡んでくる。計画内容の充実と効率的運営の実現には、綿密な計画の立案だけでは不十分である。その計画の具体化を保証するだけの予算の獲得と計画内容の円滑かつ柔

軟な運営を可能にする予算編成が最重要課題となる。さらに、計画内容の実施で支出される諸経費が、予算編成内容と基本的に合致し適正に執行されているかを監視する必要もある。岐阜大学の国際交流センターで計画される外国人留学生に対しての国際交流活動も十分に練られた計画と予算編成の上で実現している。小生は平成6年度から国際交流室員（平成7年度からは名称変更で国際交流センター員）となり、一貫して会計を担当しながらセンター運営に携わっている。会計担当に任せられた最も重要な任務は、年度毎の活動の全体の流れを的確に把握しながら予算管理することである。非力な小生が何とか役割を果たせているのは、ひとえにセンター長とセンター職員のおかげである。

平成7年の重大ニュースのトップを飾る出来事の一つである阪神大震災に関して、マスコミはボランティア活動を多面的にクローズアップしてきた。国際交流センター員の活動と質は違うもののボランティア活動の意義についていろいろと考えさせられた。

（前澤重禮）

成などが実質的任務です。

ところで、「国際交流センター」の業務としては、学術交流協定大学からの留学生を対象とする上記サマースクールを筆頭に、日本語・日本事情教育、レクリエーションの企画・運営など、留学生のための学習・研究や生活面での助言・相談に関しては、いくつかの課題を抱えながらも多大の成果を収めていると言えるでしょう。しかしながら、その“成果”と比例して、岐阜大学学生・教職員の側の国際交流に関しての理解が深まっているとは、必ずしも言えないのではないでしょうか。

私見では、眞の国際交流は、異文化を背景にした人とひとが相手の立場に立って考えるという心掛けから始まるものであり、相互理解の喜びとともに自己発見というかけがえのない経験を実現させてくれるものだと思われます。少々大風呂敷を広げてしましましたが、皆さんおひとりおひとりの国際交流の機会を提供する場を用意するのが、広報担当の使命だと考えています。国際交流をめぐっての皆さんの忌憚のないご意見を、どうぞドシドシお寄せください。（林 正子）

●広報●

岐阜大学における国際交流の理念を確認し推進するために、また、その活動の多岐にわたる企画・運営を円滑にするために、「国際交流センター」の具体的活動内容や、学内外を問わずさまざまな国際交流の話題・情報などを、皆さんにご報告・ご紹介しています。具体的には、年2・3回発行の“NEWS LETTER”的編集、毎年6月・7月に開催される夏期短期留学（サマースクール）「報告書」の編集、新入生に向けての「国際交流センター」活用のためのパンフレットの作



サマースクール報告

1995年度 夏期短期留学についての報告

国際交流センター員（工学部）・夏期短期留学総括担当

松浦晃次

1995年度における夏期短期留学生のためのサマースクールは、6月5日（月）の受付けに始まり7月28日（金）に修了証を一人ずつ手渡すことによって幕を閉じた。今年の参加者はルンド大学6名、N.ケンタッキー大学1名、ソウル産業大学5名の計12名であった。これまでの8期にわたる短期留学生の参加者数の経緯は7, 10, 5, 5, 5, 17, 12, 12であって、近年その充実ぶりは目ざましいものとなっている。今年度の大きな特徴は、韓国のソウル産業大学から初めての参加があったことと言えよう。国際色豊かなサマースクールになったものと岐阜大学の関係者各位はその実績を喜んでいる。

学生部の職員とセンター員は、4月の初めからサマースクールの準備に追われる。最初の仕事は、短期留学生の人数の確認について提携大学との間の折衝を何度も続けることから始まる。彼等の到着が近づくと受け入れのための具体的な応接が始まる。一方では国際交流センター員による宿舎の設定、ホームステイのための準備交渉などが始動する。8週間コースの留学生のための重要な課題はどのように日本語の教育を行うかにある。そのための講師依頼と日程の配分は常に国際交流センター員会議での主要なテーマとなる。それから、後半の3週間コースの留学生が加わってからの日程、すなわち日本事情の講義と実習の在り方が討議される。その年度により路線変更が生じるのは止むを得ない。少しでも改善される方向に向かうように努力しているものの批判は集まるようである。今年も、曜日の配分を考慮したり、担当の講師の方の都合を聞いたりして、5回も6回も日程表の改編を余儀なくされている。

今年度の日本事情に関する講義は、1「参禅」、2「茶道」、3「刀鍛冶」、4「仏教と仏像について」であった。ここでは講義の後で実習も行われている。それ以外の学習としては、①日本人学生を交えてのゼミへの参加、②日本の教育についての講義と討論、③国際理解の集いへの出席などがあった。さらに日本事情に関連した見学会としては、④長良川の鵜飼と、⑤大

相撲名古屋場所へ出かけた。本学からは東海地区の工場地帯が近いので、2回にわたる日帰りの見学ツアが企画された。中でも代表的な企業であるトヨタの工場見学は例年実施されていて、今年もそのようになった。それ以外に、名古屋南部工業地帯の工場へ行くのが通例であった。今年は老舗のサッポロビール名古屋工場が選ばれた。これらのツアの中において、この地方の近世の歴史の学習に役に立つようにと、尾張藩に関連する名古屋城と徳川美術館の見学も含まれている。

サマースクールの第6週には奈良・京都へ、第8週には飛騨・信州へと、それぞれ2泊3日のエクスカーションが用意されている。一つは古寺を巡り歩く日本の古い歴史と中心的文化への旅であり、一つは山岳地帯に接近する自然景観と地方文化への旅である。試行錯誤を何年も繰り返し続けた結果、訪問先およびその順序は、この4～5年の間に定着化してきた。その詳細については次号以下で報告されるであろう。ここで問題となるのはその年の気象の状況と実施日当日の天候である。現在における日程の選び方は、空模様の確率という点においては合理的となっているようだ。今年は、古都の暑さは梅雨明け前で適度の暑熱であったし、その後の山の天気は快晴に恵まれることになった。

高山の見学から戻った翌日に最終討論会が開かれた。この試みは3年前から行われるようになっている。これはサマースクールの進行がどのように留学生によって評価されているかを知るという面からすばらしい機会となっている。そして、次年度への申し送りのための有用な討論の資料が得られる。これまでには、出来る限り豊かな表現が可能となるように彼等の得意な英語での発言が奨励されていた。本年はソウルからの学生の参加があったため、共通言語としての日本語のやりとりが常に必要となった。西欧的思考と北アジア的考え方の微妙な相違が交錯する豊かな討論会となった。

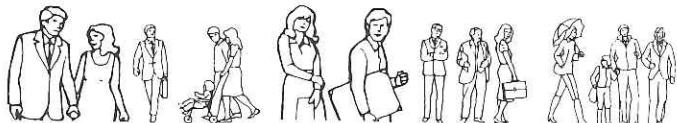
短期留学生を迎えるに当って、留学生の健康の問題が浮かび上っている。本学では医学部からのセンター員が医療関係担当としてサマースクールの構成を受け持っている。もしも、重大な病状を呈する留学生がサ

マースクールに加わるとするとき、担当者の負担が多大なものとなり日程の進行にも少なからぬ影響を与えることになる。すなわち、渡航の前から健康診断書を提出する義務が必要となろう。これからの中短期留学生を受け入れる上で、我々の一つの課題となる。

最後に、私はこれまでサマースクールのエクスカーション担当のみに携わっていたため、全体の進行の中

でいかに大勢の人々が各方面の分担に精力を費やしていたかを理解していなかった。このたび夏期短期留学の総括を担当して、無事サマースクールが完結するまでに多くのことを知ることができた。目に見えないその貴重な労力に対してここに深く感謝の気持ちを捧げたい。

留学生体験記



国立ソウル産業大学校 電子計算学 裴 美仙

今度の夏期短期留学プログラムで招待頂いてみんなに心から感謝いたします。

日本に来てはじめての日、歓迎会でみなさんの新切な姿や笑顔を見て私は日本に来てよかったですと思いました。そして、さまざまなProgramを行うことが楽しみでした。はじめ、講義を聞いた時には、日本語の聞き取りがよくできなくて理解がむずかしかったです。しかし参考書を見て実際に日本語で話すとだんだん易しく感じました。日本の昔かしの宗教や茶道や刀鍛冶について新しいことを知りました。日本のむかしの文化がたくさん残っている奈良、京都に行ってたくさん遺物を見てほんとうに日本の文化についていろいろわかりました。また、はじめての和食は口にあわなかつたのに今は、日本の食事がなれました。文化だけではなくトヨタ自動車工場を見学したりホームステイをすることは日本を知るちょうどいい機会だと思いました。すべてProgramはすばらしかったです。ただいろいろなProgramを準備する時間があったらもっとたくさん学ぶことができたと思います。例えば7月17日の「国際交流の集い」での予習を準備がぜんぜんできなくて教育について話し合うことは難しかったです。そして不便だったことは、私たちが泊っている寮の辺りで国際電話ができなかったことです。日本の人々にいろいろ指導してもらいたい楽しい夏期短期留学になりました。国際交流センターでいろいろお世話をいただきありがとうございました。

(原文のまま)

ルンド大学

トールブヨーン・オルソン

私は日本に来る前から、このサマースクールがどんなものなのか知っていました。昨年の参加者からいろ

いろ聞いていたからです。でも、僕の想像を越えるほど良かった！

先ず最初に、寮が素晴らしかったです。料理もできたり、洗濯もできたり、シャワーもあったし、その他いろいろ設備されていたから。それに、西川さんのような親切な女性達がいてくれたので助かりました。

日本語クラスに関しては、先生達から習ったことに満足しています。日本語や日本の文化の侧面についての教え方は興味深いものだったし、理解するのに役立ちました。しかしながら、5週間に14章というのも、やや多すぎるのはないでしょうか。残念な事情により、私のホームステイファミリーは変更されました。それがかえって、僕にとってはよかったです。こののも、僕の趣味は釣りで、幸運なことにファミリーの趣味も釣りだったので、週末には山でホームステイファミリーと一緒に釣りを楽しむ事ができたからです。これは、僕が日本に来て一番楽しかったことでした。

最後の3週間の講義や旅行はとても楽しかったし、勉強にもなりました。内容ぎっしりのスケジュールだったので、スウェーデンに帰ってからもその思い出はいつまでも強く思い出されることでしょう。

どれが一番良かったかと言うのはちょっと難しいけれど、京都旅行、鵜飼、相撲が印象深かったです。

このサマースクールに関わった皆さんに心よりのお礼を言いたいと思います。
(原文は英語)



ホームステイファミリーから

羽島郡岐南町 岩田美智子

我が家に来てくれたダン（ドン）は真面目でやさしい青年でした。ケンタッキー州の写真集（厚くて重い本）をプレゼントにもらい、「たった3日間のホームステイなのにこんなステキな本いいのかな。」と思いました。

すばらしい風景に見とれると、
「うちにあるぞ！ フォスターのレコード。」
突然主人が思い出し探し出してかけてくれました。
「The sun shine bright～」
「ケンタッキーフライドチキンの歌だ。」
と思ったのはわが息子でした。ダンはなつかしそうに、
「これは州の歌だよ。」
と言って、歌ってくれました。あらためてこの写真集
の風景の中から生まれた曲などと感動しました。

ステイ中、私達をお父さんお母さんと呼んでと言
うと、ダンは嬉しそうに笑って帰る時までそう呼んでくれました。そのせいか緊張もなく久しぶりに帰って來
たわが息子のように接することができました。3日目の夕方部活で息子の帰りが遅くダンにどうしようと聞くと、

「待っているからだいじょうぶ。」
と言ってくれました。3日間の疲れもあってダンと私
達はテレビを見ながら寝てしまいました。息子が帰
ったのは6時過ぎでした。送る途中、
「ホームステイどうだった？ 疲れたでしょ。」
と聞くと、
「自分の家に帰って来たみたいだった。」
と言ってくれました。楽しいステキな思い出ができ岐
大のスタッフのみなさんに大変感謝致しております。
ありがとうございました。



養老郡養老町 石井光一

ルンド大学の方のホームステイをさせていただくのは、今年で2度目です。我家には、時折、いろいろな国の人々がいらっしゃるので、子供達も、スザンナをやさしいお姉さんとして、何の抵抗もなく受け入れ、共に遊んでいただきました。ホームステイにあてられた週末の我家のスケジュールが、詰まっていたので、その前の週にも遊びに来てもらい、子供の学校の授業参観に出かけたり、家で日本料理を作ったりしました。文化や生活習慣に深い関心を持っていて下さるので、何を話しても楽しく、スウェーデンの情勢なども教えてもらい、とても貴重な一時を過ごしました。自分たちのスケジュールがあいていれば、何度でも招待したいと思うのですが、この夏は忙しくて、呼んであげられないのが残念です。ホストファミリーと留学生の方との出会いが決められた週末ではなく、もう少し柔軟性を持って交流できると良いのではないかと思います。

最後になりましたが、先生方はじめ交流室の皆様、本当にご苦労様でした。交流プログラムの益々の発展をお祈り致しております。



本巣郡北方町 北村 望

我家の息子が岐阜大学三年生、国際交流クラブに入っていた時の事です。突然スウェーデンの留学生のホームステイファミリーをしてほしいと言われ、主人と私は、まさかこんな古い昔の家ではと、不安を持ちながらも、日本語も学習歴があり日常生活にもこまる事はほとんどないからと聞かされ、息子を留学させてやれない分、これも家族で経験が出来るのも幸福だと思い受け入れを承知しました。

受け入れに関して、初めは二ヶ月でしたので、家族の一員であるようにと迎え私達の事も、お父さん、お母さんと、呼んでくれました。食事の時、難しい言葉などすぐ辞書を手に調べる姿はやはり学生らしく感心しました。

四人目の体験ですが、同じホームステイをされた方との交流も出来うれしく思いました。

今回の方は、丁度釣りが好きとの事、我が家も主人も息子も好きなので二日間でしたが、この時期ならではの鮎釣りに揖斐川の上流、旧徳山村迄出掛けました。

道中徳山村だった話や、ここはダムになる場所などの、説明にも熱心に聞きいり、川での難しい流れの動きにもすぐ慣れ疲れもみせず本当にうれしそうに喜んで頂きました。

スウェーデンに帰ったら、サーモンなどの大きな魚を釣った写真を送りますと約束してくれました。

このような素晴らしい交流を出来る限り大切にしたいと思います。(K母より)

日本語授業

1) メインテキストには『日本語中級Ⅰ』(国際交流基金 日本語国際センター)を使用。第1、2週は1校時、2校時ともにテキスト中心の授業、第3、4、5週は1校時のみテキスト中心の授業とした。尚その間にテキストに基づいた発展として、また日本での実生活に必要な項目として、自己紹介、手紙の書き方、日本の家庭への訪問、お礼の挨拶と手紙等をテキストの項目に沿って取り入れた。

2) オリジナル教材は第3、4、5週の2校時に扱った。内容は担当者によって異なったものを選択した。

3) 日本語のコースに関する感想

◎学生について

- ・全体的におとなしく真面目な学生が多くだったので、授業中も比較的静かで、その点教える側にとって

やり易い面と、授業の盛り上がりに欠ける面とがあった。

- ・反応が受け身的で、積極性に欠けた。
- ・昨年、宿題が多いという注文が出たので、今年はほとんど宿題を出さなかったことが、積極性を欠くことにつながったかもしれない。
- ・日本語の能力が『読む』『書く』に偏っており、代入練習や文法事項、作文はよくできていたが、『聞く』『話す』は弱いようで、話したいことがあるのに思ったように話せないと、つい母国語や英語が出るようだった。
- ・キャンパス生活では、グループの仲間だけで行動することが多いようで、生きた日本語に接する機会が少なかったようだ。
- ・ノーザン・ケンタッキーの学生は日本語が専攻ではないにも拘わらず、予習をしっかりして授業に参加していたので、こちらがレベル差を心配するほどることはなかった。
- ・理由がない限りは無遅刻、無欠席で、お行儀が良かつた。
- ・レベルや雰囲気が分かってきた後半は、進み具合がスムーズになった。
- ・体調が悪い学生がいて、みんな気遣っていることは良かったが、時には気分が沈みがちになることもあった。
- ・慣れない環境での集中コースなので最後には疲れが見えた。

◎その他

- ・涼しい国から来て、休む時間もなく、すぐ勉強を始めた学生にとっては、暑いのにクーラーが使えないのは非常に辛そうだった。
 - ・教室が狭く、隣の学生ともくっついて授業を受けなければならなかつたので、余計に暑苦しそうだった。クーラーが使えないのなら、来年はもっと大きな教室は用意してほしい。
- (加藤由起子)

国際理解の集い

今年度第1回目の国際理解の集いが、サマースクールの第7週目にあたる7月17日(月)午後1時30分より、大学会館第6集会室で行われました。今回の特徴は、岐阜県日米協会が後援する Lisle Fellowship in Gifu という異文化交流プログラムとのジョイント企

画になったことです。このプログラムへのアメリカ、台湾からの参加者12名と、サマースクールのLund, NKU, ソウル産業大学からの留学生12名に、中国、インドネシア、ベトナム、ザンビアからの岐阜大学長期留学生5名、日本人学生、院生、6名、日本人教員1名、一般人3名の計39名が6つのグループに分かれ、グループ討議を行いました。

テーマは、「教育制度」について。それぞれが架空の国の教育委員会のメンバーという設定で、教育制度をデザインするという一種のdecision makingの課題が提示されました。我々日本人には、このような想像力を要求される課題は、大変難しく思われましたが、参加者は約2時間にわたり実に熱心に討議を行いました。この討議の過程で各国の教育制度が紹介され、相互理解をある程度深めることができたように思います。当日の午前中行われた“Education in Japan”と題した講義にほとんどの参加者が出席していたことも共通の基盤作りに役立ったと思われます。

討議後各グループの代表がまとめのレポートを行い、それに基づく若干の質疑を行いました。問題点としては、使用言語が英語だったことで、韓国からの留学生には不満が残ったかと思います。しかし、Lundの学生が英語から日本語への通訳をかけてくるなど、日本語学習の成果の一端が見られました。

(国際理解教育担当・松川禮子)



新任紹介 はじめまして

国際交流係 事務補佐員 田中千亜紀



はじめまして。4月から国際交流センターの事務補佐員として皆さんのお仲間に加えていただくことになりました。私は以前から国際交流に大変関心があり、出来ることなら国際交流に関わる仕事に就きたいなと常々思っておりましたが、なかなかそういう機会に恵まれることなく、今回の自分の幸運さにびっくりしながらも、とても嬉しく思っています。国際交流活動はこれからもっともっと活発になっていくことだと思います。いろいろな国人達に日本の良さをわかってもらいたいながらまた、相手の国の良さをも理解していくことはとても楽しいことですが、一方ではとても難しいことかもしれません。表面的には理解できても、やっぱり心の奥底では“外人”扱いしてしまうところが日本人にはあるのでは?と思うのは私だけでしょうか。しかし、これも民族の違いですから仕方の無いことかも知れません。ですから、日本人であること、そして同時に国際人であることのバランスをうまくとって、留学生の方たちに少しでも多く日本を理解してもらい、

そして好きになつてもらえたなら、と頑張っていこうと思っています。どうぞ宜しくお願ひいたします。

留学生係 事務官 小林恵子



6月1日付けで医学部医事課入院係から学生部学生課留学生係に配置換えになりました。よろしくお願ひ致します。大学での専攻が、日本語教育だったこともあり、留学生係の仕事を、やりたくて仕方ありませんでした。こんなに早く自分の希望する仕事に就けたことに、感謝し、日々精進していきたいと思っています。留学生の方と接する度に、「このままではいけない」と反省しています。たくさんの時間を無駄使いしてきましたことを後悔し、勉強しなくてはいけないと考えさせられます。常に知的な刺激を得られる場所に自分がいることを本当に幸せに思います。

仕事は、まだまだ初心者で留学生の方に気を使ってもらっている毎日です。早く仕事を覚え、何かあったら一番に相談される事務官になれるよう頑張ります。

◎ 国際交流のための奨学寄附金

岐阜大学では、平成7年3月現在、209人の留学生が勉学・研究に励んでいます。また、学術交流協定大学として、すでに次の11大学と提携を結んでいることは、ご承知の方も多いでしょう。カンピーナス大学（ブラジル）、サンディエゴ・ステイト大学（アメリカ）、浙江大学（中国）、広西農業大学（中国）、電子科技大学（中国）、無錫輕工業学院（中国）、浙江医科大学（中国）、中国医科大学（中国）、ルンド大学（スウェーデン）、ノーザンケンタッキー大学（アメリカ）、ソウル産業大学（韓国）——これらの大学に加え、昨年から今年にかけて、さらにサントトマス大学（フィリピン）、グリフィス大学（オーストラリア）の二大学と協定が結ばれました。岐阜大学の国際交流もますます

すきかんになっています。

このような国際交流活動を推進するために、国際交流センターは、留学生のための日本語や日本事情などの授業を始め、さまざまな行事を開催しています。こうした事業は、主に企業・団体等からの温かいご援助—奨学寄附金で運営されています。

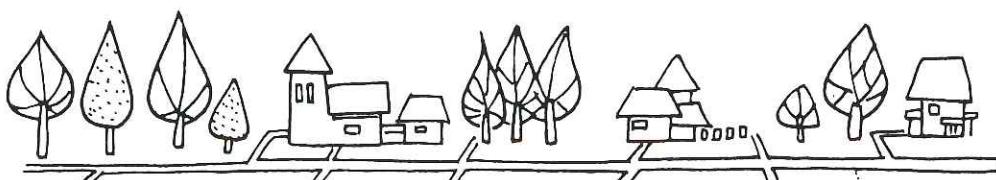
平成6年度は岐阜大学における国際交流促進のために、次の企業・団体から寄附金をいただきました。皆さんにご報告するとともに、この場を借りて心よりの謝意を表したいと思います。

大垣共立銀行、十六銀行、岐阜瓦斯、大日本土木、田口福寿会、太平洋工業、イビデン、岐阜車体工業株式会社、中部電力岐阜支店、サンメッセ株式会社、長良川病院、株式会社スギヤマカレトロ（旧 株式会社杉山鉄工所）、日本耐酸塗工業、国際ソロプロミスト岐阜、岐阜信用金庫（順不同）

岐阜大学国際交流センター員名簿

任期 * H 6. 4. 1 ~ 8. 3. 31
H 7. 4. 1 ~ 9. 3. 31

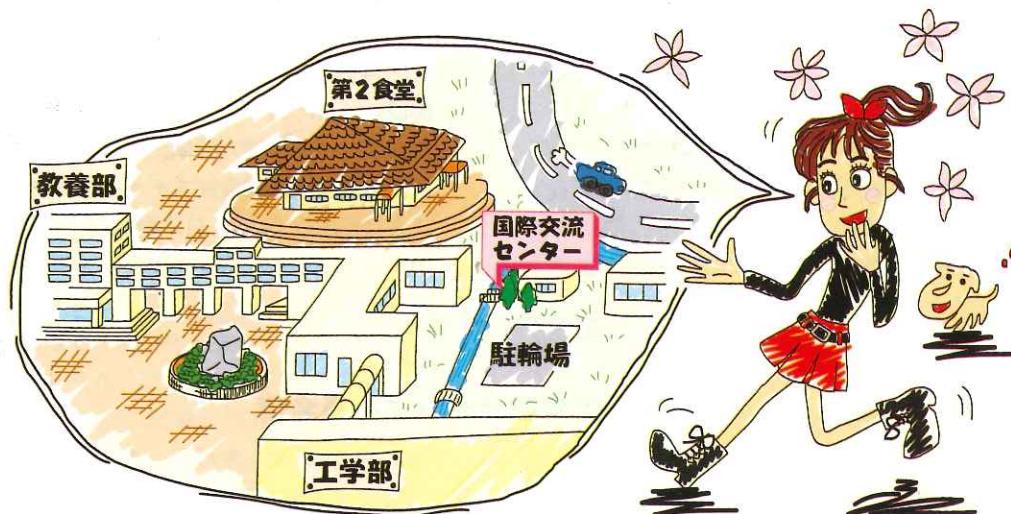
所 属	氏 名	備 考 ・ 連 絡 先	所 属	氏 名	備 考 ・ 連 絡 先
農 学 部	堀 内 孝 次 *	国際交流センター主事 2846	工 学 部	松 浦 晃 次 *	サマースクール総括 イクスカーション担当主任 2722
教育 学 部	松 川 禮 子	国際理解教育担当 2315	農 学 部	原 徹 夫	ホームスティ・宿舎担当 2908
"	佐 原 秀 一 *	日本事情担当主任 2270	"	前 澤 重 禮 *	会計・宿舎担当主任 2898
医 学 部	奥 野 正 隆	医療関係担当 267-2604	教 養 部	林 正 子	広報担当 3016
"	加 藤 直 樹 *	医学部広報主任 267-2343	"	三 浦 陽 一 *	日本語担当主任 3131
工 学 部	辻 康 之	学生担当 2570	医 療 技 術 短 大	瀬 戸 崎 康 子 *	歓送迎会担当主任 サマースクール総括(副) 262-1533



◎ お知らせ

●国際交流センターでは、本年度のサマースクールの内容、参加者の感想・意見、今後の実施に向けての課題などをまとめた「1995年度岐阜大学夏期短期留学報告書」(10月末日発行予定)を作成中です。「報告書」をご覧になりたい方は、国際交流センターまでご連絡ください。

●今年度から、従来の「国際交流室」が旧工短ホールに移転し、名称も新たに「国際交流センター」として発足しました。さまざまな国際交流の行事を開催するとともに、学術交流協定大学や奨学金など留学のための情報や、地域・学内の国際交流活動の内容をお知らせしています。どうぞご来館ください。



◎ 編集後記

「国際交流室」から「国際交流センター」へと名称が変わって初めての“NEWS LETTER”をお届けします。皆さんに「岐阜大学国際交流センター」のことを少しでも知っていただきたいと、取り敢えず今回は発足の経緯・活動内容のご紹介が中心となりました。

今年度からセンター員として参加させていただいておりますが、さまざまな交流活動の場に臨むたびに、「国際交流センター」開設にあたっての大勢の先輩諸氏のお骨折りを思わないではいられません。岐阜大学

における今後の国際交流活動をあだ疎かにできないという自覚を促されます。

メイン行事のひとつである今年度サマースクールも無事終了し、その成果の一端を今回ご紹介しました。紙面の都合で、留学生全員の感想・意見を掲載できなかつたのがとても残念ですが、「お知らせ」にも記しましたように、10月末には留学生の生の声を収めた「1995年度岐阜大学夏期短期留学報告書」をまとめる予定です。

岐阜大学国際交流の発展を祈念した声・声・声が、ひとりでも多くの〈アナタ〉に届きますように……。

(林 正子)

発行 岐阜大学国際交流センター

広報係

〒501-11 岐阜市柳戸1-1

☎ (058) 293-2142

FAX (058) 293-2143

印刷 昭和ぶりんと